

特集「市長選に子どもも投票！」

都内初 小平市長選挙 自分たちの手で『こども選挙』実施



題字 井口 文章
再刊 特別号
印刷・発行
錦城高等学校新聞委員会
編集室 2025

みんなでつくる
錦城高校新聞

一面：都内初！小平でこども選挙実施
選挙当日の様子を密着しました
二面：こども選挙当日に向けて準備
こども選挙から実際の選挙へ

4月6日（日）小平市長選が行われた。それにあわせて、「こども選挙」が実施された。新聞委員会では2月16日に行われた選挙委員会発足式から参加し、当日の様子も同行取材させてもらうことができた。一面では選挙当日の様子を中心に伝える。

5. 6日こども選挙投票

4月6日、私たちは小平ショッピングセンター投票所で行われた。小平市立選挙委員会のメンバーと、保護者4人が中心となって10時からの投票開始に向けて着々と準備が行われていた。そして午前10時を迎え、投票がスタートした。



小平ショッピングセンター投票所の運営を担当した6人の小中学生

始めこそ人は少なかったものの、5人の選挙委員による「子ども選挙やっていませ！」という大きな声で呼びかけ、通りかかった子どもたちに「子ども選挙やりませんか？」と話しかけた甲斐もあって気づくと投票所には長蛇の列が。



投票をする子どもたち

投票に訪れた子どもたちを候補者の情報載った壁新聞の前に引き連れて、「ここに書いてあることを読んで、自分がいいなと思った人を選んでね」と選挙について優しく教える姿や、投票を終えた子どもたちと青木さんをはじめとする子ども選挙委員の大人たちで行われ、数え間違いが無いため、声を出す必要がなかった中、黙々と数を数えている姿が印象的だった。中には、判別が難しい票もあり、「小さいけど、〇ってことで

姿が印象的だった。15時に投票終了を迎え、会場の撤収作業を行った後、18時30分からなまちデラスのホールにて開票作業が行われた。開票は集まった6人の子ども選挙委員の子どもたちと青木さんをはじめとする子ども選挙委員の大人たちで行われ、数え間違いが無いため、声を出す必要がなかった中、黙々と数を数えている姿が印象的だった。中には、判別が難しい票もあり、「小さいけど、〇ってことで

こども選挙は投票日の夕方から、なまちデラスで開票された。開票の結果、投票数476票だった（有効投票数471票、無効投票3票、白紙投票2票）。得票数は小林さんが236票を集めトップ、次いで松岡さんが160票、宮川さんが75票となった。

候補者名	松岡あつし	小林洋子	宮川かずゆき
子ども選挙 得票数	160	236	75
本選挙 得票数	22162	33677	4873

開票結果は「大人の選挙」とほぼ変わらず 見えてくる「情報と機会の重要性」

3677票を集め、市長に選出された。こども選挙実行委員の青木さんによると、子どもと大人で全体票に占める候補者の割合とさほど変わらなかったそう。



周りの意見に流されず、自分でよく考えて投票する子どもたちの姿があった

兄弟はどの人が1位なのかと想像しながら仕分けをするという緊張感もあったという。翔さんは「一票、二票も間違えられないというプレッシャーがありました」と開票作業を振り返った。



一票一票、丁寧に開票作業

「初めてでドキドキ」投票の感想 親は選挙を考え直すきっかけに 実際の投票に訪れた井上さん一家。お母さんによると、子ども選挙を企画している友人から投票に誘われたことをきっかけに訪れたという。



多くの参加者が「こども選挙」に対して真摯に向き合った

「初めてでドキドキ」投票の感想 親は選挙を考え直すきっかけに 実際の投票に訪れた井上さん一家。お母さんによると、子ども選挙を企画している友人から投票に誘われたことをきっかけに訪れたという。

実行委員の小中学生 選挙終えて語る 「どう行われているか知れて良かった」 当日、小平駅の会場では、6人の小・中学生が子ども選挙委員として子ども選挙の運営に携わった。委員の皆さんに、選挙を終えた感想を聞いた。



賑やかな駅前、パワフル宣伝中！

「長谷川紫乃さん（小4）」「思ったより楽しかった。最初は恥ずかしかったけど、やってみると楽しかった」

「子どもが学校について意見を言っても良い」 早大招聘研究員に聞く 「こども選挙」の意義 「やってよかったこども選挙」

取り組みを主催するのは、市内小学校の元 PTA 会長が集まって組織する「こども選挙実行委員会」。メンバーに、早稲田大学マニフェスト研究所招聘研究員で、子ども・若者参画研究会幹事を務める青木佑一さんがおり、発起人となった。青木さんは、今回投票してくれた467票という数は子ども選挙の有権者の数からすると小さな

数字に思えるかもしれないとうえで、「通りすがりに投票してくれた子ども、ルネこどもで知って動画を事前に見て考えてくれた子ども、親に連れられてきたけどじっくり考えて投票してくれた子どもたちの経験は、かけがえのないものだと感じます」と話した。



広報新聞を前に真剣に投票に向き合う

様々なウェブ記事や新聞記事、テレビも含めた報道機関に取り上げられたことで、大人のほうからこういう活動を広げたいという反応もあったそう。さらには、子ども選挙委員の親子と出演することがあったそう。青木さんは「2人の活動の感想を聞いて、みんなでの取り組みを創りあげられたと実感しました」と振り返る。

「こども選挙」の意義 「やってよかったこども選挙」 取り組みを主催するのは、市内小学校の元 PTA 会長が集まって組織する「こども選挙実行委員会」。メンバーに、早稲田大学マニフェスト研究所招聘研究員で、子ども・若者参画研究会幹事を務める青木佑一さんがおり、発起人となった。青木さんは、今回投票してくれた467票という数は子ども選挙の有権者の数からすると小さな数字に思えるかもしれないとうえで、「通りすがりに投票してくれた子ども、ルネこどもで知って動画を事前に見て考えてくれた子ども、親に連れられてきたけどじっくり考えて投票してくれた子どもたちの経験は、かけがえのないものだと感じます」と話した。

むらさき草

今回のこども選挙で投票所に訪れた子どもたちの様子を見ていて、気づいたことがある。それは、みんな真剣に考えていたことだ。投票所では3人の市長候補の情報が載った壁新聞が掲示されており、子どもたちはそれを見て投票をする。私はその壁新聞の作成をお手伝いさせていたのだが、書かれた内容は難しく、壁新聞を読んだ投票してくれた子どもは、実際に投票に訪れた子どもたちは、どの子も真剣に壁新聞を読んでいた。5歳から中学生まで、私が見ているなかで壁新聞を読まずに投票した人は一人もいなかった。確かに子ども選挙の投票は、実際の市長選に影響しないし、子どもたちもそんなことはわかっていよう。でも子どもたちは皆、自分が誰に票を投じるのか悩みに悩みながら自分の意思を決めていた。今回のこども選挙の企画を主導した青木さんが、次のように語ってくれた。「子どもは知識と情報がないだけで、適切な情報と機会があれば、考える力と決める力はあるのだと改めて感じました。子どもたちは選挙権をまだ持っていないけど、私たちが思っている以上に選挙に対して真剣に考えることができるし、考えている。それなのに、投票権を持っていない若者は投票に行かないで平気な顔をしている。どうしてそんなことができるのか！？今回のこども選挙の実施を見届けた一高生生の感じたことである。」「私たちにできることは、投票に行くことだ。」「たった一票」と思えるかもしれないが、そんな一票でも集まれば大きな力となる。錦城生全員が投票するだけでも1500票という数になるのだ。自分が持つ一票の大切さ。これを深く心に刻んで、18歳になったら選挙に行こう。」

こだいら
こども選挙

子どもたちの手で選挙準備

投票箱準備、新聞づくり、商店街で宣伝

多様な視点とアイデアで工夫を凝らす

小中高生 こども選挙実行委員務める

今回のこだいらこども選挙は、有志が集まった小中学校生が、実行委員として活動を行った。二面ではワークショップや準備会を経て、様々な準備を重ねてきたこども実行委員会の様子をお届けする。

(編集部共同取材)



準備を終え、ポスターや投票箱と共に全員で記念撮影！！

実行委員の瓜生和成さんは、「大人も子どもも政治に対して自分事として考えることが大切なので、私たち大人が意見を押し付けることなく、どんな意見でも子どもたちが話しあっているという見守るという意識で運営しています」と語った。

みんなに読まれる新聞を

また、3月23日(日)に行われた子ども選挙準備会では、子ども選挙の開催に向けて様々な準備が行われた。集まった約20人の小中学生は子ども選挙新聞づくり、投票所設置、ポスター張りの3チームに分かれて準備を行った。

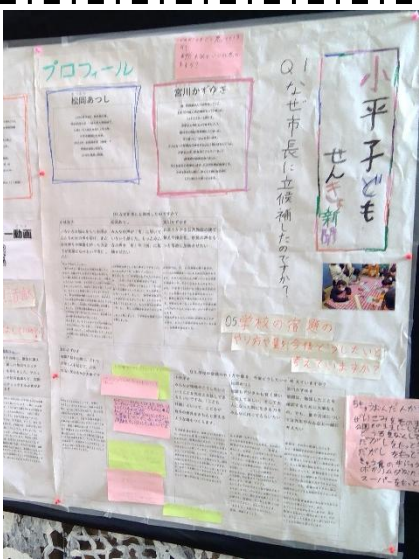
新聞づくりでは、投票当日に投票所に張り出す壁新聞の準備を行った。4人の小学生がみんなに読んでもらえるような新聞を目指して、協力してレイアウトを考える姿が印象的だった。レイアウトを作っていくうちに「文字が小さいのでは？」というところが話題に。大人たちが頭を悩ませる中、「大事なところ

発足式を取材しました

編集委員がまず参加させてもらったのは、委員会の発足式。2月16日(日)に小平市中央公民館工作室にてこども選挙委員会発足式が行われた。この日は、集まった15名の市

内の中小学生が選挙について理解を深めたり、候補者に対する質問を考えたりした。会の最後では実際に考えた質問を選挙候補に届けるための動画撮影が行われた。

編集委員、こども選挙新聞づくりに参加



候補者の情報が模造紙にびっしり

こども選挙実施にあたっては、新聞委員会も壁新聞づくりをお手伝いさせていただきます。完成した新聞は投票当日に各投票所に掲載されました。子どもたちと協力して新聞作成をすることができて、大きな達成感を得ることができました。

組む立てが終わると、黒板前に集まったこどもたちが、何やら会議をしているようです。話していたのは、6日当日に立てる「こども選挙」の旗についてだ。配置や大きさ、書く言葉などをたくさんシミュレーションした。漢字かひらがな、色はどうするかなど、様々な観点からチェックするこどもたち。

そして、いざ、実際の模造紙に文字を書き込んでいく子どもたち。のぞいてみると、「小平こども選挙」というカラフルな文字が、多くの人に伝わりやすい、旗が完成！



みんなで協力して新聞づくり

本番さながらの投票所設置

投票箱チームは、4月6日の本番に向けた練習として、みんなで協力して投票箱や投票台の組み立てを行った。どちらも、実際の選挙で使用される本物で、こどもたちは興味津々だ。「意外と軽い！」「ここに留め具があったんだ！」と新しい発見が沢山あった。

組む立てが終わると、黒板前に集まったこどもたちが、何やら会議をしているようです。話していたのは、6日当日に立てる「こども選挙」の旗についてだ。配置や大きさ、書く言葉などをたくさんシミュレーションした。漢字かひらがな、色はどうするかなど、様々な観点からチェックするこどもたち。



実行委員会が作成したポスター 子どもたちが商店街に配ったり、貼ったりした

子どもたち自ら地域に宣伝

こども選挙のポスターを抱えたこどもたちは、学園東商店街へ向かった。元気な挨拶とともに店を訪れ、宣伝用のポスターを店に掲示してもらえないか交渉を行う。「こども選挙っていいよね、選挙権のないこどもたちが選挙に参加するための活動なんだよ」と活動の趣旨を自らの口ではきはきと説明する小学生の姿。こどもたちが主体的に活動に取り組んでいる様子に感銘を受けた。また、「日頃からこのお店にはお世話になってるから、ポスター貼ってもらえるかも！」と目星をつけて店を選び、店員とこやかに会話を



「ポスター貼ってもらえるかも！」

高校生の参加者も

準備に盛り上がりを見せる中、一人、パソコンと向き合う高校生の姿が。「マニユアルを見て、当日の動きを考えていました」と話すのは、高校3年生の岩田優梅さんだ。小平市の公民館に、なんと

「政治や選挙のことを身近にしたい」こども選挙実施の裏側を取材

大人たちの想像を超える子どもたちの発想に驚き

「正直な話、もし誰も手伝ってくれなかったらどうしよう。せめて一人でも意識を持った子供が参加してくれたらうれしいくらい的心境でした」と語るのは実行委員として子どもたちを支えた瓜生和成さん。開催してみたら、多くの子どもたちが想像を超えた意識を持って集まってくれたそうで、「選挙活動に対して私たちの発想を超えたアイデアには驚きました」と活動を振り返った。様々なメディアを通じて活動を知ったという地域の方からも声をかけられるなど、反響は大きかったそうで、現在では近隣の市からも問い合わせが来ているという。瓜生さんは「選挙権がない子どもたちや政治や選挙のことをよくわかっていない市民でも選挙に携わることができるということを



選挙委員として一生懸命活動に取り組んできた子どもたち



世代を超えて、大人も子どもも一緒に「選挙」について考えた

こども選挙を通じて広めていけたらと思います」と話す。自分自身も家で政治や選挙の話をしていない子ども時代を過ごしたそうで、「分からないこと、知らないことがあるのは実は大人も一緒だったのかもしれない」と振り返った。そのことを踏まえて、みんなで話をし、学びの場を持って、選挙や政治のことを身近にしていきたいと話してくれた。子どもたちに向けて「分からないことがあったら大人に聞いてみてください。そして、大人も分からないことがあったら一緒に調べてみましょう。いい街を、いい世界を、想像

同じくこども選挙実行委員を務めた保護者の田野明日香さん。自身が選挙委員を務めていく中で、子どもたちの変化を感じることがあったという。田野さんは、「はじめのころは、お母さんがやっているから子どもたちも(選挙委員の)集まりに来るって感じだったのですが、活動が続けていく中で、子どもたちが自発的に活動に参加するようになるのを感じました」と語る。さらに子どもたちの中で選挙への関心が高まっていくのを感じたといい、田野さんは「選挙カーが通るときに、以前はうるさい車だねって感じだったのですが、今回の選挙ではあれ、〇〇さんの車だ！！って言うていて、選挙に関心をもってくれたのだなと感じました」と振り返った。

選挙への関心を校内調査 昨年は有権者生徒の約8割が投票



私たちが投票させてもらった

新聞委員会では、昨年の7月7日に行われた東京都知事選挙の際、昨年度の高校3年生にアンケートを行っている。回答者105名のうち、79.1%が投票した。一方で、投票に行かなかった、投票しないという意見の中には「外が暑い」「ネット投票なら行くけど、直接は疲れる」という声もあった。近年の日本の選挙では投票率が低下傾向にある。2024年衆院選の投票率は53.85%でこれは戦後3番目に低い数字だった。10代の投票率は39.43%、20代では34.62%という驚異的な低さだ。今回の小平市長選挙の投票率は38.86%となっている。

5%が投票に行くと回答していた。選挙に行った理由として「今の政治に不満がある」「権」と語り、「ネットなどで見たり、不満があったりするなう声があった。同時に都知事選挙に行けばいいと思えるなう」と話す。また、主権者だということ、認識してほしいという思いを語った。

取材の内容は全て春休み中のものです。ここまで、掲載が遅くなってしまったことをお詫び申し上げます。

直近では、6月22日に都議会議員選挙が、7月までに参議院選挙が行われます。3年生の中には有権者となる錦城生も少なくありません。今回の紙面が、選挙に対して少しでも意識を向けたり、高めたりするきっかけとなれば幸いです。